

受付No.

## 2026年度 アートによる地域振興助成（一般）

公益財団法人 福武財団 理事長 福武英明殿

募集要項に則り、本応募用紙に記載した通り、標記助成に応募いたします。

## &lt;団体プロフィール&gt;

団体名	飛生アートコミュニティー				
住所	〒059-0642 北海道白老郡白老町竹浦520				
団体区分	任意団体	スタッフ数	70 名		
代表者氏名 (カナ)	クニマツ キネタ	役職	代表	年代	40代後半
代表者氏名	国松 希根太				
団体URL1	https://tobiu.com/				
団体URL2	https://www.instagram.com/tobiuofficial/				

## &lt;申請者・実務担当者&gt; ※団体所在地と同じ場合は「同上」\*申請者には、助成に関する諸手続きの連絡担当者の名前を記入してください。

申請者氏名 (カナ)	モリシマ ヒロシ	役職	パフォーマンスディレクター	年代	40代後半
申請者氏名	森嶋 拓				
連絡先 e-mail	hm@racka-sapporo.com	電話番号	080-5591-0098		
住所 (書類の送付先)	〒063-0801 北海道札幌市西区二十四軒一条6丁目1-3-401				

## &lt;プロジェクトリーダーの略歴&gt; ※アートプロジェクト等の運営経験や当時の役割を記載してください。

氏名 (カナ)	モリシマ ヒロシ	役職/肩書	パフォーマンスディレクター	年代	40代後半
氏名	森嶋 拓				
年 (西暦) 月	略歴 (活動内容)				
2011年9月	2011年から現在に至るまで、飛生芸術祭のパフォーマンス部門を担う				
2012年7月	CONTE-SAPPORO Dance Centerのプロデューサーに就任				
2015年2月	コンテンポラリーダンスフェスティバルを現在に至るまで毎年開催				
2017年2月	北海道舞踏フェスティバルを2024年まで毎年主催				
2018年9月	白老町内の住民企画「まち×ひと×アート」をプロデュース (2022年まで)				
2019年8月	NPO法人JCDNと協働して「振付家育成事業」を2024年まで実施				
2022年11月	北海道×九州文化芸術交流をプロデュース (2024年まで)				
2024年6月	NPO法人コンカリーニョと「教育×アート」事業をはじめ				
2025年4月	教育×アートのネットワーク「スパークプラグアライアンス」を立ち上げる				

## &lt;福武財団の助成実績&gt;

助成を受けて活動した年度
2016年度, 2019年度, 2020年度

## &lt;外部協力者の状況&gt;

氏名	年代	組織名	所在地 (市町村まで)	協力内容 (できるだけ具体的に)
菊地 辰徳	40代後半	株式会社haku	北海道白老郡白老町	白老町でギャラリーなどを運営しており、同時企画や商品開発などで幅広く連携
斉藤 拓大	60代前半	飛生福祉館	北海道白老郡白老町	飛生福祉館の管理運営ならびに、飛生地区の町内会長も務めており、運命共同体のような存在
原口 弘子	60代後半	地域住民	北海道白老郡白老町	幅広いネットワークをもち、地域をつなぐコーディネーターとして、飛生の活動に不可欠な存在
田中元	70代	飛生福祉館	北海道白老郡白老町	飛生地区で長年にわたって町内会長を務めてきて、飛生の歴史と文化について教えてくれている
曾根 一	60代後半	竹浦物産竹材店	北海道白老郡白老町	飛生のある竹浦というエリアで長年にわたって竹材店を経営。資材提供をはじめ、様々な面でご支援いただいている。

<活動内容・事業計画について>

表現手法	地域型芸術祭
活動テーマ	郊外（の地域振興）
事業名	創立40周年記念 飛生芸術祭2026「僕らは同じ夢をみる」（仮）
2026年度の活動期間	2026/03/20 ～ 2025/10/26
活動に従事するスタッフ数	15名

1. 団体の活動の概要

<p>1986年に廃校となった白老町・旧飛生小学校を拠点に、日本中からアーティストを含む多様な人々が入り出し、森とアートのコミュニティを形成しています。</p> <p>校舎を共同アトリエとして活用する一方で、春から秋にかけて行う森づくりの拠点にもなっており、地域の人々の交流の場や、災害時には避難所としても機能しています。</p> <p>2010年より「飛生芸術祭」を毎年開催。</p> <p>自然と芸術、人と表現が交わる場を育み、土地の記憶を次世代へつなぎつつ、手を広げすぎない「小さな芸術祭」として持続的な創造の循環を目指しています。</p>
---

2. これまでの活動の沿革

申請事業の活動年数	10年以上
年（西暦） 月	活動内容
1986年5月	飛生アートコミュニティを設立（第一世代）
2010年8月	第二世代が初めて「飛生芸術祭」を開催
2011年9月	飛生芸術祭の名物イベント「TOBIU CAMP」が初開催
2020年9月	コロナ禍で「トビウの森と村祭り」を初開催
2024年9月	14回目となる飛生芸術祭を開催

3. 活動エリアについて

活動エリア	北海道 白老町旧飛生地区
活動エリアの特色（歴史、文化、地域性、魅力など）	<p>飛生（とびう）は北海道白老町の山裾近くにある、10世帯未満の小さな集落です。造材・製炭業、牧場経営、さらには鉱山での採掘が営まれていた歴史があります。</p> <p>地名「飛生（Tupiu）」には、アイヌ語で「ネマガリダケ（根曲がり竹）が多いところ」とする説と、「黒き鳥という名の鳥にちなむ」とする説が伝わります。</p> <p>過去には軽便鉄道が敷かれ人口が多かった時代がありましたが、鉱山の閉山以後は人の営みが静まり、近隣に広がる森が主要な風景をなしています。旧飛生小学校が1986年に廃校となった後は、アーティストが集う共同アトリエとなり、この地域と共に歩んできました。</p>
活動エリアの課題（まず初めに、活動エリアにおける課題を簡潔にご記載ください。続けて、その課題の背景や詳細について、できるだけ具体的に記入ください。）	<p>1) 限界集落化と消えゆく地域社会 飛生地区では高齢化や人口減少が進み、現在10世帯を切っている。交通・買い物・学校・医療などの生活インフラが無い奥地では、人口増加は望めない。暮らしや文化の継承を支えてきた仕組みがゆっくりと途絶えつつある。</p> <p>2) 開発がもたらす環境の崩壊 近年、採石業者の採掘による山や土地の掘削がもたらす地形崩壊。メガソーラー業者の進出による景観の崩壊。これらによって動植物の住処の崩壊や移動経路の分断、美しい景観の損失が続いている。</p> <p>3) 土地の記憶の継承 地域の衰退と環境変化の中、地域が営んできた歴史、風土、土地の記憶や文化を私たちの活動においてどのように残していけるか。</p>
貴団体の地域に対するミッション（活動の目的）	<p>弊団体は39年間にわたってこの地に根を張り、催事や清掃活動など、町内会の小さな営みに積極的に関わり続けてきた。この限界集落において、マンパワーや施設の維持管理、開かれた交流拠点という意味でも、いまや地域に欠かせない存在である。年齢や背景の異なる多様な人々が一年中通い続け、土地に賑わいを創出しながら活動を継続していることは、住民にとってひとつの希望となっている。衰退する地域の流れに抗うことは難しいが、アートを通して地域を見つめ、作品を通して記憶や文化の断片を可視化することはできる。地域に関わり続けること、そして芸術祭を通して発信し続けることが、これまで続けてきた営みの芯である。</p>



7. 2026年度プロジェクト評価の観点や指標をどのように設定しますか。

定性（状態的な目標）、定量（数値的目標）をお書きください。

定性目標

1. 地域住民や地元企業が、芸術祭を契機に地元資源の魅力や潜在する可能性を自覚すること
2. 白老市街地の住民および文化関係者が、飛生地区や弊団体に対し新たな関心を寄せる契機を生むこと
3. 組織内における若年層の参画促進と、次世代軽症の意識を高めること
4. 限界集落における現実と向き合い、それぞれが地域の在り方を考える契機を生むこと。

定量目標

1. 芸術祭期間中の延べ来場者数：1週間で1,000名以上
2. 地元住民、卒業生など地域協力者との関り：15名以上
3. 地域外からの創作・運営協働（新たな関係創造人口）：新規30名
4. SNSフォロワー数7,500人を目標に情報発信力を強化。

評価・検証

来場者数やSNS分析、参加者アンケート、地域内での反響などを通じて客観的に検証する。

また、町内会や協力者からのフィードバックを次年度以降の企画運営へ反映し、地域・世代・外部がゆるやかにつながり続ける状態を長期的な成果指標とする。

8. 2026年度の翌年以降の、地域に持続的に関わる中期計画と将来ビジョンをお書きください。

※一般申請者は、その計画・ビジョンの展開がこれまでの活動の積み重なりどのように紐づいているかと、その展開に事業や運営体制をどのように反映していくかについてもお書きください。

1980年代から2000年代までは第一次世代がこの場を築き、守ってきた。

2000年代から現在に至るまでは第二世代が活動を拡げ、飛生芸術祭の名は海外にも届くようになった。

当初30代であった主要メンバーも今では50歳前後となり、それぞれの分野で専門性や影響力を持ちはじめている。

一方で、こうした成熟は同時に「次の担い手をどう迎え入れるか」という課題を浮かび上がらせている。

40周年事業は、そのバトンを第三世代にどう受け渡すかを考える節目である。

翌年度以降は、若手メンバーや新しいアーティストが主体的に関われる場を増やしていきたい。

ただし、手は広げ過ぎず、身の丈にあった持続可能な活動を意識し続ける。

飛生の強みは、ここだけにしかない時間と関係性であり、それを守りながら更新していくことが重要である。

今後は、芸術祭に限らず年間を通じた制作や森づくりを継続しながら、アーティスト、企画者、会社員、木こり、主婦、猟師など、分野を越えて人が行き交うこのオープンな環境を維持していく。

久しぶりに訪れる人が新しい誰かを連れてきて、また次の世代へとつながっていくような、そんな自然な循環そのものが、飛生という場の力であり、継承のかたちでもある。

10年後の50周年を「第三世代が自らの言葉で飛生を語る年」と位置づけ、持続可能な循環を目指していく。

9. 2026年度以降、複数年の助成を希望していますか？

今はわからない

<活動の様子>



森の中に点在する作品の数々。この作品は永田まさゆき「飛生橋」



飛生芸術祭で行われた舞踏パフォーマンス。踊り手は石井則仁。



アトリエでの制作風景。アーティストは国松希根太。

